堂平 HBS 論文問題について

5 人委員会

吉田道利、井上允、唐牛宏、中田好一、寿岳潤

●問題の経緯

・1980 年代、菊池氏が中心となり堂平観測所の MCP の後継機として HBS（偏光分光測光器）の構想が練られ、開発がスタート。HBS は堂平観測所の共同利用装置との位置付け。
・1994 年より岡崎氏が実質責任者となり HBS 開発が進められた。このころより菊地氏は次第にサポートに回るようになった。
・1995 年 9 月堂平将来 WG が結成。菊池氏はメンバーに入っていない。
・1996 年 3 月菊池氏所長退任
・1996 年 4 月 HBS 将来会議。器械論文の書き方について議論。岡崎氏中心に書くことになった。
・1996 年 9 月検出器を TI-CCD に変更。CCD にあわせて HBS 公募用の仕様を 4500A から 7000A とした。しかし、この変更は菊地氏には知らされなかった。
・1997 年 1 月 HBS 共同利用開始
・1997 年 2 月ごろ菊池、平田会談。堂平将来 WG の人選について。
・菊地氏所長退任から退職に至るまでは、菊池氏はあまり堂平に顔を出さなくなった。一方、平田氏らは菊地氏に HBS 開発指揮を期待した。菊池氏は、おそらく HBS 検討会への出席で開発に寄与し、ある程度実際の作業は現場に任せる気であったのだろう。しかし、検討会の場ではかなり強硬な意見を提出する場合もあったという証言があり、どの程度を現場に任せるか、どこまで自分の方針を貫くかという点であいまいであったと思われる。平田氏らは実際の開発作業を実質上菊地氏抜きで行っており、HBS 検討会での議論を経て目標レベルは菊池案を尊重して設定していたと証言。
・1998 年 3 月菊池氏退官。
・1998 年夏ごろ　問題の器械論文の準備はじまる
・1998 年秋　菊地氏に著者名なしのドラフト送る。酷評されて帰ってくる。このドラフトにつき、菊池氏は、「事前の相談がなかったこと」「著者名が抜けていること」に大きな不満と疑念を抱いた。また、実際に内容にも満足はいっていなかった。平田氏らの思惑としては菊地氏が全面的に書き直してくれるものと思った。が、ここでも行き違いが起こった。
・1998 年 12 月　論文を PASP へ投稿。5人委員会では、この行為がもっとも問題であったと思っている。チーム内部の実情がどうであれ、
＊開発に功績のあった人（菊地氏）と十分な議論を行わず
＊さらにはそれらの人々（国立天文台元堂平関係者）の功績を論文中に明確にせず
＊ いわば装置としては中間段階のもの（これは後に検出器やレンズを交換して、当初の設計方針に近い完成形を作り上げたことからわかる）
を強引に論文としてまとめたと思われるからである。チーム内部が非常に危機的状況にあったとしても、客観的に見て十分な議論することが必要であったと思う。また、もしそのような

議論も許さないような雰囲気であったならば、論文出版は差し控えるべきではなかったか。論文に掲載された中間段階の HBS であれば、研究会集録などにのせるだけでも十分であったように思われる。

・1998 年 12 月　菊池氏から岡崎氏へ長時間電話。論文取り下げを要求。
・1999 年春頃から断続的に菊池氏から論文取り下げ要求。掲載決定後は謝罪要求。しかし、これらに対する平田氏らからの直接の回答なし。
・1999 年 7 月検出器を SITeCCD へ
・1999 年夏ごろより菊池氏から各方面に HBS 問題に関する文書送付。
・1999 年秋　光赤外ユーザーズミーティングで菊地氏が HBS 問題に関して発言
・2000 年 2 月　5人委員会結成

●問題経緯のまとめ

1. 菊池氏退官前後にHBSグループ内の意見調整がうまく行われず、グループ内で開発の主導権をどうしていくかについて意見の一致を見なかった。
2. 菊池氏はHBSの開発を大事に思うあまり、ときとしてグループ内の他のメンバーに対し強硬な意見を主張し続けるなど極端な行動に出ることがあった。また、グループ内の他のメンバーによるHBS開発方針変更などの情報がうまく伝わっていなかったため、菊池氏を疎外する動きがひそかに進行しているのではないかと勘ぐるようになった。
3. 問題の HBS 論文著者（以下、著者と呼ぶ）らは度重なる菊池氏の行動に参ってしまい、菊池氏の真意を掴みきれないまま、菊池氏がプロジェクトそのものを気に入らないとしてつぶそうとしていると思うに至った。
4. 問題のHBS論文は以上のようなグループ内の状況下において、著者らを中心に書かれたものだが、著者らはある程度論文がまとまった段階で菊池氏に草稿を送り、菊池氏の意見を求めた。著者らは菊池氏から建設的批判及び意見が出てくるであろうと想定していた。しかし、これが菊池氏にとってはまさに自分が疎外された結果の最後通牒と思われたため、全面的に否定する返事を送った。菊池氏はまた、論文の内容そのものも当初の設計方針から大きく外れたものであると判断し、そのような内容を発表することは自らへの侮辱であるとともに、著者らによる成果の横取りであるとも受け取った。
5. 一方、著者らは菊池氏からの全面否定の返事を、「気にいらないものはつぶすつもりだ」という文脈で捉え、菊池氏への明確な反論あるいは説得を行わず、菊池氏および菊池氏が指摘した天文台関係者を著者からはずした上で、PASPに投稿した。
6. 投稿を知った菊池氏はただちに取り下げるよう著者らに迫ったが、著者らは明確な回答を避けたまま論文の出版手続きを進めた。著者らには、論文が出版されてしまえば自分達の正当性が認められ菊池氏は引き下がるであろうという判断があったものと思われる。一方、菊池氏は再三にわたって、論文が出版されてしまえば自分は黙っていないということを主張していた。双方のコミュニケーションは断絶状態であったためにお互いに相手の考えをよく理解しないままに論文の出版に至った。

●５人委員会の活動経緯

1. 1999年秋の光赤外ユーザーズミーティングでの菊池氏の問題提起に触発され、有志が小平台長（当時）と相談して、2000年2月に5人委員会が発足した。台長の私的な諮問機関として、菊池氏から提起されている問題の把握・整理をして台長に報告すること、および問題の性質により、問題点の仲介や公開なども視野に入れて、双方からの意見を聞くことを開始した。

2. 菊池氏からの問題点提起の聴き取り後、まず問題点を整理した中間報告を2000年2月23日付中間報告としてまとめ、台長に提出した。同時に著者等からの聴き取りの機会の設定を台長に依頼し、3月に懇談した。

3. 3月末までに問題の整理が完了せず、小平台長から海部新台長に、5人委員会の役割・作業が引き継がれた。その後、元安藤堂平観測所長や、双方との意見調整等を行ない、12月に「5人委員会報告書」を作成した。これは台長および双方に示された。

4. 2001年8月末に開催された岡山ユーザーズミーティング（第12回光赤外ユーザーズミーティング）で、5人委員会から経過説明と、双方の見解を表明する機会を持った。これは1999年の光赤外ユーザーズミーティングに端を発していること、およびコミュニティーへの問題点の公開の観点から行われた。

5. 上記の「5人委員会報告書」に示された行動提起に対して、双方の意見調整を合意を得る努力が続けられた。進展が遅れているのは反省する点である。しかしまた、5人委員会の権限は無く、双方や関係者に対して何ら強制力や裁判権などを持つものではない。問題点を整理したうえで、関係者やコミュニティーの判断を仰ぐことも重要と考え、下記の提案とともに、今回のユーザーズミーティングの場で報告を行なうこととした。なお、今年始めに本委員会代表を井上から吉田に交代した。

●今後の方針案

1. 無断投稿に関する謝罪に関しては、5人委員会が、論文掲載誌（PASP）に謝罪文掲載の打診をしてみる。拒否された場合は、国立天文台正式文書として堂平ホームページに謝罪文を掲載することとする。

2. 内容訂正は、著者達が、菊池論文の不適切な引用などを訂正文としてPASPに載せる。

3. 著者追加については、関係者の同意の上で、著者達がPASPに申し入れる。